

当報告の内容は著者の著作物です。

第6回基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー

「文化遺産」の人類学

平成23年2月12日(土) 14:00-17:30

東京外国語大学本郷サテライトオフィス7階会議室

現代中国における無形文化遺産保護の言説と実践

—「文化生態」論と「文化生態保護エリア」実験を中心に—

阮 雲星 (浙江大学教授 国立民族学博物館外国人研究員)

本報告は、報告者が22年度民博において実施した研究課題「中国における無形文化遺産保護の言説、政策と実践」の研究成果の一部であるが、研究方法論の問題関心はAA研の基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」に共鳴する。

本報告は研究内容について主に以下のものを検討する。

まずは、中国の文化遺産保護及び「文化」構築における「文化生態」論を検討する。報告者は、現代中国における「文化生態」論は、1) 現地の住民・生活者による「文化」保護の「文化生態」論、2) グローバル化の負の影響から文化の多様性を守る「文化生態」論、3) 生態人類学の展開から見られる「文化生態」論であると整理した上で、これらの異なる文脈からの各論には、民間・民俗文化の重視から、そこにある生活者・伝承者に目を向け、さらに文化と社会・自然環境との関係、及び文化適応と変遷・発展に理論的関心を示し、探索しつつあるという共通点があると指摘する。

次に、無形文化遺産保護における「ナショナル文化生態保護エリア」実験の経緯と特色について検討する。報告者は最近の「ナショナル文化生態保護エリア」実験に至るまでの中国における文化遺産保護の試みを次の三つのタイプの「文化生態保護」実践として整理した。つまり、1) 「民族文化村」から「(民族)村寨博物館」への実践、2) 新「博物館」理念から「生態博物館」への実践、3) 「文化・生態・新農村」(総合的)理念から「民族文化生態村」への実践である。そして、それらの異なる内外的文脈で展開した実践の経験を受け継ぎつつ、国における一つの重要な全体的な保護方式として「文化生態保護エリア」実験が実施された側面があると試論した。さらに、閩南文化生態保護エリアと浙江省にある海洋漁文化(象山)生態保護エリアの形成及び保護実践を初歩的な研究に基づいて紹介・検討しながら、保護のトップダウン的体制と複数のセクターの協働的なメカニズムという特徴を指摘した。

本報告は研究方法論の問題関心について主に以下の考えを提示する。

現代人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関は、おそらく構築主義と関連付けずには論議できないだろう。そうするならば、実験人類学以来、内省民族誌と政治経済民族誌がミ

クロとマクロ系の連関を代表するものとして展開しているが、これから「身体論」と「コモンス論」は「構築」という方法論から見れば、まさに「間身体」論まで深く検討するものとして、或いはマイクロ-マクロ系の連関に有効な中間的な概念・理論として注目すべきだろう。このような視点から、現代中国の文化遺産保護及び「文化」構築における知識人たちの言説活動は当代文化遺産学の一つの重要な研究内容と方法論にもなるだろう。